HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	樺太アイヌ語の数詞について
Author(s)	村崎, 恭子
Citation	津曲敏郎編 = Toshiro Tsumagari ed., 71-84
Issue Date	2009-03-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/38301
Type	proceedings
Note	北大文学研究科北方研究教育センター公開シンポジウム「サハリンの言語世界」. 平成20年9月6日. 札幌市
File Information	08murasaki.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サハリンの言語世界（津曲敏郎編，北海道大学大学院文学研究科，2009: 71−84）

樺太アイヌ語の数詞について

村 崎　恭 子
（元横浜国立大学教授）

１．はじめに

文字のないアイヌ語は話された地域によって大きく三つの方言、北海道方言、樺太方言、千島方言に分けることができる。ここではこれを北海道アイヌ語（Hokkaido Ainu, ＨＡ)、樺太アイヌ語（Sakhalin Ainu, ＳＡ）、千島アイヌ語（Kuril Ainu, ＫＡ)と、その略号で呼ぶことにする。

このうちＫＡは明治時代にすでに話者は絶えたと報告され、ＨＡ、ＳＡも老人間で会話が成立していた 70 年代を最後に日常語として話されなくなってから半世紀が経過した。

私がやっているのはＳＡの記述的研究だが、まずその話者との出会いと交流について簡単に述べる。私が研究を始めた 1960 年代には、戦後樺太から引揚げてきたＳＡの家族が複数住んでいた北海道の常呂町（トコロチョウ、当時は常呂郡だったが現在は北見市になった）では老人たちの間で盛んにアイヌ語が話されていた。この時代に私が教わったＳＡの先生は、藤山ハルさん（1900－1974）西海岸ライチシカ出身、太田ユクさん（1894－1976）西海岸タラントマリ出身、長嵐イソさん（1867－1964）東北海岸タライカ出身、の 3 人であったが、74 年にハルさんが亡くなると同時にこの状況は消え、話者の絶滅をみんな嘆いていた。しかし 10 年後に B.ピウスツキ蝋管再生プロジェクトのおかげで奇跡が起きて、もう一人の優れた最後の話者、浅井タケさん（1902－1994）西海岸オタスフ出身に私は巡り会い、亡くなるまでの 10 年余り沢山習うことができた。一方、明治時代に話者が絶えたと伝えられていたＫＡについては、1960 年に私が東大の言語学科学部 3 年生のとき始めた常呂町でのフィールドワークの 2 年目の 1962 年の夏に、千島アイヌ語の話者を訪ねて根室周辺を巡ったことがある。戦後引揚げてきた千島アイヌの方々の消息をたよりに、ことばを覚えていそうな 50 歳から 63 歳までの 6 人の方々に面会してアプローチしたが、結局みんな自分たちのことばを忘れてしまったという空しい結果しか得られなかった。この時の詳しい報告は（村崎 1963）を参照されたい。残念ながら今はＳＡもＫＡもすでに話者が絶えたと認めざるを得ない。

ＳＡの最後の話者が絶えてからすでに 15 年がたった今、定年退職して余裕ができたので、2008 年 9 月に北大で開催されたシンポジウム『サハリンの言語世界』の発表をきっかけにして、ＳＡ，ＫＡ，ＨＡの方言比較研究を数詞についてやってみることにした。

アイヌ語の数詞法は 20 進法というのが定説である。しかしＳＡの現代語、18 世紀前半のＫＡ，現代ＨＡの旭川や宗谷方言などでは 10 進法が認められる。本研究では、この実態をＳＡの数詞法を中心にＫＡ，ＨＡとも比較しながら具体的に考察して、アイヌ語数詞法の実態、言語変遷とその歴史的背景について、皆さんと一緒に考えてみたい。

２．アイヌ語の数詞法

アイヌ語の数詞法の基本は hot (20) を基準とする 20 進法であるというのが定説で、こ

れはＨＡに限定すれば正しいが、各方言を詳しく見ると必ずしもそうではない。ＳＡの現代語、18C 前半のＫＡ、現代のＨＡ旭川や宗谷方言などでは 10 進法が認められる。この実態を以下に、ＨＡ，ＫＡ、ＳＡ，の順で具体的に考察する。

2.1 北海道アイヌ語（ＨＡ）の場合

ＨＡ資料の背景＊

調査者	調査年	被調査者、背景、方言、地域など
上原熊次郎	1793、寛政 4	『藻汐草』江戸通辞が編纂した 2500 語が収録されている分類アイヌ語辞典、フィッツマイエルやチェンバレンのアイヌ研究の原資料となった。
能登屋円吉	1864、慶応 4	西モンベツの番人、能登屋円吉がイシカリでの勤務中、上川方面まで出かけ蝦夷人と交わり集めた語彙集。
能登屋円吉	1868、文久 4	西モンベツの番人、能登屋円吉が採集した分類西蝦夷語辞典。約 1200 語が巻末にいろは順に並んでいる。
田村すず子	1955 昭和 30	平賀サダ、鳩沢ふじの、『アイヌ語方言辞典』のための調査、沙流方言。
服部四郎	1955 昭和 30	門野ナンケアイヌ、『アイヌ語方言辞典』のための調査、旭川方言。

＊ 各資料の実例は巻末の６つの表で示した。［表１］千島アイヌ語の数詞、［表２］［表３］幕末和資料数詞（1）（2)、［表４］［表５］［表６］は方言別数詞比較表、ただし［表３］の最後の『樺太土人語日用会話』は幕末ではなく明治 38 である。

ＨＡ数詞法の特徴

ＨＡは三大方言中最もアイヌ語の原初的特長を保っている。方言の数も話者の数も圧倒的に多いから資料も豊富である。ただし、話者の激減はＨＡでも顕著である。2008 年 12 月現在存命する完璧な話者は数人にとどまる。

幕末資料の全て、旭川方言と宗谷方言を除く現代の全ての方言（八雲、沙流、帯広、美幌、名寄）は「20」を意味する hot を基準語とする 20 進法である。しかし、現代の旭川と宗谷方言では、本来は 20 を意味する hotne を「10」を示す基準語として用いて 10 進法が行われている。これは比較的新しいＳＡの影響によるものと思われる。つまり、ＨＡでは古来 20 進法が固持されていると言える。

1 から 10 までの基本数詞の語形成の由来については、諸説あって、興味ある話題であるがここでは触れない。

2.2 千島アイヌ語（ＫＡ）の場合

ＫＡ資料の背景［表 1］

調査者	調査年	背景、方言、地域など
Krasheninnikov	1738	カムチャッカのポリシェレックでポロムシル出身の千島アイヌから採録。
Dybowskii	1879-83	ポーランドの医師としてカムチャダルで勤務した。その間シュムシュ島出身の千島アイヌから 1900 語を調査。ラドリンスキーが後に 1892 年に編集出版した。
鳥居竜蔵	1899	色丹島へ移住したＫＡから 700 語を収録。

ＫＡ数詞法の特徴

１．1 から 9 まではＨＡ，ＳＡと本質的に同じ。ただし、18Ｃの（Kra.1738）では８と９の tupis(ampe), sinepis(ampe) の(ampe)の部分が省略されて、tupis-, sinepis- と言うことは特に注目する必要がある。この特徴は同時代の『もしほ草』にも認められる。

２．10 以上の数は、18Ｃ前半のクラシュニンニコフ資料では、wampe（〜十）を基準語とする 10 進法が一般的に行われている。しかし 1000 以上の数の表現に (h)otne （20）の痕跡がある。例えば、1000 は wan-otne-wampe(10×10×10) 2000 は tu-wan-otne-wampe (2×10×10×10) というように示される。ただしこの時点では otne は（20）ではなく（10）の意味で用いられている。

３．11 から 19 までは、ＨＡやＳＡと同様に１の桁の数を最初に言って xx kasuma（余り）と言って続けるが、ＫＡが特徴的なのは wambe kasuma の順序がＨＡ、ＳＡと逆になっている点である。たとえば、11 は、Shine Wampe Kasouma（ＳＡは sineh ikasma wanpe）という。

４．20 から 100 までの数については、18Ｃの（Kra.1738）では 10 進法だったのが (h)ot, (h)owat を基準とする 20 進法に逆戻りしている。（Torii 1919）（Dybowski 1879-82, Murayama 1992）

５．また、100 以上の数詞の言い方は特徴的である。100 は、Kra 資料では wan-wampe (10×10) で 10 進法、しかし 19Ｃ末の鳥居資料で aruwan-howat (6?×20)、（Dybo 1879-82）で askinot (5×20)となっていて、20 進法である。

６．1000 は、18Ｃ，19Ｃ全ての資料で同じ、10 進法であるが、(h)otne が本来の意味（20）ではなく、（10）の意味で用いられている。つまり、1000 は、wan-otne-wanpe (10×10×10)。この特徴は現代旭川方言と宗谷方言に共通する。これは注目すべき点である。ｃｆ。旭川、宗谷方言で sine-hot (10), tu-hot (20)。

これをまとめると以下のようになる。

・ＫＡでは最古の 18Ｃ資料（Kra.1738）ですでに、wampe を基準語とする 10 進法が行われている。しかも多数の数、10000 まで記録されている。このことは、ＫＡではＳＡより早く多数の物資を扱う交易が行われていたことを示唆する。

・しかしその後 19Ｃの資料（Dybo 1879-82）（鳥居 1899）では 20 進法になってしまってい

る。ただし、100 までで、多数の記録はない。

・一般的に言って 10 進法の方が多数を容易に数えられると想像される。ＫＡやＨＡの場合にあてはまる。

・同時代の異なる方言の数詞法に共通点が見られる。例えば、（もしほ草 1792）と（Kra.1738）で 8,9 の tupis(ampe), sinepis(ampe) の ampe が省略されていること。［表 5］

３．樺太アイヌ語（ＳＡ）の数詞法

ＳＡ資料の背景

調査者	調査年	背景、方言、地域など
La Perouse	1787	サハリンの Tchoka（オチホ、落帆？）で 161 語を採録。
Dobrotvorski	1867-71	ロシアの軍医としてサハリンに滞在した時 1 万余語を収録。
Laufer	1899	ドイツ生まれのアメリカの言語学者。サハリンの南東岸で調査した。
Pilsudski	1902-4	ポーランドの民族学者でサハリンに流刑されてニブフ語やＳＡを多く収録した。（Piu 1912）に tanku についての記述はあるが、kunkutu については未出で触れていない。
金田一京助	1913	『あいぬ物語』の付録の「樺太アイヌ語大要」。tanku も kunkutu もでてくる。
服部四郎	1955	樺太ライチシカ方言話者、藤山ハルさんから語彙調査。『アイヌ語方言辞典』

ＳＡ数詞法の特徴［表４］

１．1 から 10 までは、ＫＡ、ＨＡと基本的に同じ構成。違うのは、音節末の -p がＳＡでは -h になることと（5）を意味する asiknep の子音クラスターを嫌って k が抜けて 'asneh となっていること。

２．11 から 19 までは、1 の位の数を先に言って ikasma（余り）をつけて wanpe (10) を続ける。これもＨＡ，ＫＡと同じ。ただし、ＫＡでは 'ikasma と wampe の順序が逆になっている。

３．20 以上は 10 進法になる。20 から 99 までは、外来語 kunkutu（～十）の導入によって kunkutu の前に 1 の位の数をつけて tu-kunkutu（20）、re-kunkutu（30）、iine-kunkutu（40）のように 10 の位を言って、1 の位を続ける。例えば、21 は tu-kunkutu-sineh と言う。ここで注意すべきは、10 を表す語は *sine-kunkutu ではなくて wanpe（10）であること。

４．次に注意すべきは、20 を表す「老人ことば」'onne 'itah として **hohne** (20) が報告されていることである。服部（1957）参照。これは、ＳＡでも昔は 20 を表すのに hohne が用いられて 20 進法が行われていたことを示唆する。

５．10 の単位と同様に 100 以上も、外来語 tanku（～百）の導入によって sine-tanku（100）、tu-tanku（200）、re-tanku（300）のように言う。

６．（～千）は wan（10）と tanku（100）を組み合わせて wantanku（～千）という。例えば、2008 年は、tuwantanku 'orowa tupesan paa（2 千それから 8 年）と言う。このようにＳＡでは 1000 の単位までは多数を容易に数えることができる。

７．人を数える助数詞（～人）の表現については、ＨＡの sinen（1 人） 'iwaniw（6 人）の V-en, C-iw のような語尾はなく、文字通り sine'aynu（1 人）、'iwanaynu（6 人）のように表現する。

以下に、**kunkutu**（10 の単位語）、**tanku**（100 の単位語）について、その出現状況を資料にしたがって見ていく。

１．　この二語はＳＡ最古の資料であるラペルーズ（1787）には登場しない。ここでは 20 は、wampebi kasma (wampe)(10＋10)、30 は、wampebi kasma cine-ho(10＋1×20)、40 は、 ine wampe(4×10), または tu-ho (2×20)というように、20 進法の基準語である ho が残っているが、同時に wampe を（～十）を表す 10 進法の基準語として用いている。つまり 10 進法の兆しが見える。［表５］

２．　kunkutu と tanku の二語は共にドブロトボルスキー（1975）に載っている。ドブロトボルスキーはこの本の補注で、数詞の 20 進法がＳＡでは基本的な手法であると強調しているが、辞書の本文では kunkutu、 も tanku も詳しい説明がある。

３．　ドブロトボルスキー（1867－71）でも、ラウファー（1899）でも hoh(20)を基準語とする 20 進法が基本的に行われる一方、同時に **kunkutu、tanku** を基準語とする 10 進法が導入されて優勢となり、10 進法と 20 進法が共用されている。同時代のピウスツキ資料（1912）には、第 14 話のキーリンの話の中で **tanku** は沢山でてくる。**tanku ;** hundred , a word of Olcha origin.として、テンをとる罠を数えるのに使う 100 を数えるオルチャ語だと説明している。**kunkutu** については言及がないが、不在とは書かれていない。ピウスツキと同時代を生きたバチラー（1938）には **tanku** はあるが **kunkutu** は出ていない。

４．　金田一（1913）のヤマベチ出身の山辺安之助の南極探検などの自叙伝の付録、樺太アイヌ語大要の中で、**kunkutu、tanku** が共に山丹語から外来要素として移入されて（～十）を**-kunkutu、**（～百）を**-tanku** という用法が流行していって、交易などで多数の品物を数えるときには、この 10 進法ばかりが使われている、と報告されている。しかしここで注意すべきは、千以上の数を表すのに hoh が保守されていることである。つまり 2000 は、hoh-tanku (20×100)と表す。例えば、2001 円は sineh ikashma hohtanku。[表６]

５．　そして服部（1964）では、**kunkutu、tanku** による 10 進法のみが報告されている。ただし「老人ことば」で hohne(20) が報告されている。ただし、*sine-kunkutu とは言わず wanpe という。

６．　いずれにしろ **kunkutu、tanku** の 2 語は、ＨＡにもＫＡにもなく、ＳＡだけに流布したことばで、この背景には歴史的な必然性があったようだ。

４．まとめ

以上の考察からアイヌ語の数詞について以下のことが確認された。

１．アイヌ語の数詞において、1～19 までは方言、時代を問わず基本的に共通である。アイヌ語は原初的にはどの方言でも 20 進法であったと思われる。

２．時代と共に 10 進法と 20 進法が交差するようになった。ＳＡでは 20 以上の数詞について 10 進法が kutunkutu や tanku などの外来語を基準語として発達して浸透した。これのきっかけになったのはクロテンなどの毛皮交易の発達が考えられる。

３．しかし 20 進法が古く 10 進法が新しいと一概には言えない。ＫＡでは 18Ｃ前半の最古の資料（クラシェニンニコフ 1738）にすでに wampi (10) を基準語として 10 進法が行われている。

４．それが、19Ｃ後半（デイボフスキ 1879-84）（鳥居 1899）になると 10 進法は姿を消して ot (20) を基準語とする 20 進法に逆戻りをしている。

５．各資料例を 10 進法か 20 進法かでまとめると以下の表のようになる。各項目の最後の（ ）内は基準語の形式を示す。

６．これを見ると 20 進法から 10 進法へ移行する場合に基準語として外来語を移入する方法と、自国語を転用する方法とがあることが分る。

20 進法か 10 進法かの方言と基準語

20 進法	旭川と宗谷を除くＨＡ方言（八雲、幌別、沙流、帯広、美幌、名寄）(hot)。 幕末資料すべて（ホツ）。 ＳＡの（Lap.1787）(ho)。 ＫＡの（Dyb.1879-83、鳥居 1899）(ot)。
10 進法	ＨＡの旭川、宗谷方言。（hotne） 19 世紀以降のＳＡ資料（Dob.1867-71、Lau.1899、金田一 1913、服部 1955）。(kunkutu, tanku) ＫＡの（Kra.1738）(wampe)
両用	ＳＡの（Lap.1787、Dob.1867-71、Lau.1899、金田一 1913）

最後にこれまでのことから、アイヌ語数詞法における 20 進法から 10 進法への言語的推移の過程をＳＡとＫＡについて推論すると以下の様なプロセスが仮定できる。これはあくまでも筆者個人の想像の域を超えるものではない。周辺分野の専門家の御批判を待ちたい。

［ＳＡ数詞法の推移］

１．18Ｃ末に tanku が満州語経由で流入し、少し遅れて kunkutu がカムチャダール語経由で流入して、10 進法が始まった。

２．19Ｃになると、tannku や kunkutu を使った 10 進法が、クロテンなどの毛皮交易を中心に多用されるようになった。同時に hohne (20) が多数を表す単位語として使われて残った。

３．20Ｃにはいると tannku と kunkutu を使った 10 進法が完全に浸透して、hohne (20)は古語、老人ことばとしてのみ残った。

［ＫＡ数詞法の推移］

１．18Ｃ前半（Kra．1738）にすでに 10 進法が wampi (10) を使って行われていた。
２．しかし 19Ｃ後半になると 10 進法は姿を消して、ot (20) を基準語とする 20 進法が行われるようになった (Dybo1879-83, Torii 1899)。
３．ＫＡでは 20 進法から 10 進法へ移行する際にＳＡのように外来語を用いることはなかった。同様な言語の保守的傾向はＨＡの旭川や宗谷方言にも見られる。

今後の課題としては、アイヌ語の諸方言、特にＳＡやＫＡと周辺言語との言語接触がいつ、どこで、どのように起こったかを明確にすること、またその文化的歴史的背景、特に交易のルートなどの背景を明らかにすることなどである。

その他、興味深いことは、一般的に言って 20 進法よりも 10 進法の方が多数を数えるのに容易という傾向が認められる。つまり、10 進法が記録されている方言、ＳＡのライチシカ方言や（金田一 1913)、ＫＡの（Kra.1738）などでは、大きい数まで収録されていることから、これらの方言では大きい数を頻繁に使う歴史的要因があったと推測できるのである。オホーツク文化の伝播経路や後の山丹貿易の流通路などが大きなカギを持つと思われる。周辺領域の研究者の皆さんの御教示を得たいと切に願う。

＊［村崎が習った樺太アイヌ語話者の方々］敬称略
藤山ハル（1900－1974）西海岸ライチシカ、　太田ユク（1894－1976）西海岸タラントマリ
長嵐イソ（1867－1964）東北海岸タライカ、　浅井タケ（1902－1994）西海岸オタスフ

参考文献

服部四郎 (1957)「アイヌ語における年長者層特殊語」『民族学研究』21/3［『日本の言語学』大修館に収載］
服部四郎 (1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
林子平 (1785)『三国通覧図説』天明 5
池上二良 (1997)『ウイルタ辞典』北大図書刊行会.
金田一京助 (1913)「樺太アイヌ語大要」『あいぬ物語』博文館.
金田一京助 (1935)「数詞から観たアイヌ民族」『日本民族』岩波書店.
ラペルーズ, 小林忠雄編訳 (1988)［1797］『ラペルーズ世界周航記　日本近海編』白水社.
村崎恭子 (1963)「千島アイヌ語絶滅の報告」『民族学研究』29/4
村崎恭子 (1979)『カラフトアイヌ語―文法編』国書刊行会.
村山七郎 (1971)『北千島アイヌ語』吉川弘文館.
村山七郎 (1992)『アイヌ語の起源』三一書房.
田村すず子 (1913)「アイヌ語」『言語学大辞典』第一巻. 三省堂.
鳥居龍蔵 (1903)『千島アイヌ』吉川弘文館.

上原熊次郎 (1792)『藻汐草』寛政 4. ［金田一京助解説 成田修一撰『アイヌ語資料叢書 藻汐草』国書刊行会, 1972 に復刻］

Batchelor, J. (1938) *An Ainu-English-Japanese Dictionary.* Fourth Edition. Iwanami-Shoten.［J.バチラー『アイヌ・英・和辞典』岩波書店］

Dobrotvorskii, M.M. (1875) *Ainsko-Russkii Slobar'.* Kazan.［M.M.ドブロトボルスキー『アイヌ語ロシア語辞典』カザン］

Klaproth, J. (1826) *Asia Polyglotta Sprachatlas.* Paris.

Klaproth, J. (1831) *Trois Royaumes.* Paris.［林子平（1785）『三国通覧図説』の仏訳］

Laufer, B. (1917) The Vigesimal and Decimal Systems in the Ainu Numerals: With Some Remarks on Ainu Phonology. *Journal of the American Oriental Society*. vol.37.

Murayama, S. (1968) *Ainu in Kamchatka.*『九州大学文学部紀要』12.

Pilsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Languages and Folklore.* Cracow. In K. Refsing ed. *Early European Writings on the Aainu Language*, vol.10, Curzon, 1996.

Refsing (1996) Milet-Mureau. L-M. *Voyage de La Perouse autour du monde* (Paris. 1797) Glossary of Ainu in vol.3. In K. Refsing ed. *Early European Writings on the Aainu Language*. vol.1, Curzon, 1996.

Tamura, S. (2000) *The Ainu Language.* 三省堂.［「アイヌ語」『言語学大辞典』第 1 巻, 三省堂の英訳］

Torii, R. (1919) Les Ainou des Iles Kouriles. *Journal of the College of Science. Imperial University of Tokyo*, vol. 42/1.［鳥居龍藏『千島アイヌ』東京帝国大学理科大学紀要. 第 42 冊第 1 編］

クラシェニンニコフ S. (1755)『カムチャッカ地誌』ペテルブルグ.

ラドリンスキー編 (1892)『クリル列島のシュムシュ島に住むアイヌの方言辞典、B．デイボフスキー教授蒐集』クラコフ.

Numerals in the Sakhalin Dialect of Ainu

Kyoko MURASAKI
(Retired Professor, Yokohama National University)

The Ainu language can be divided into three main dialect groups: Hokkaido Ainu (HA), Sakhalin Ainu (SA), and Kuril Ainu (KA). It is generally considered that the Ainu number system is based on a vigesimal system. However, as far as modern SA is concerned, a decimal system is used. This paper gives actual examples from the available materials and compares them with KA and HA. I hope to consider the relevant linguistic changes and historical background with everyone here.

[表1]

Numerals in Kuril Ainu　千島アイヌ語の数詞

Japanese	Krasheninnikov 1738 (Torii, 1919)	Krasheninnikov 1738 (Murayama 1968)	Krasheninnikov 1738 (Murasaki 2008)	Torii 1899 (Torii 1919)	Dybowski 1879-83 (Murayama 1992)
1	Sipnep	Sinep	sinep	Shine	sinip
2	Tonoup	Tuup	tuup	Dobetchi	tubic
3	Rep	Rep	rep	Rebitchi	ribici
4	Inep	Inep	inep	Inep	inip, inini
5	Asik	Asik	asik	Ash'kimep	askinip, asikinini
6	Ivan	Ivan	iwan	Iwampe	yevampiy, ivanini
7	Arouwan	Aruan	aru'an	Arouwampe	arvampiy, arvanini
8	Toubis	Tubis	tupis	Dobisampe	tupsampiy, tupsanini
9	Sinepis	Sinepis	sinepis	Shinibesampe	sinip sampiy
10	Ououpis	Uupis	uupis	Wambe	vampiy
11	Sinep-ikaemoua	Sinep-ikasmua	sinep-ikasmua	Shine Wampe kasouma	sinip vampikasma
12	Tououpitcha ikasmoua	Tuupitschi ikasmau	tuupica-ikasmua	Dobetchi Wampe Kasouma	tubic vampikasma
13	Repitch (ikasmoua)	Reepitsch-ikasmua	reepici-ikasmua	Rebitchi Wampe Kasouma	ribic vampikasma
19	Sinepisan	Sinepisan-ikasmua	sinepisan-ikasmua	Shinebesampe Wambe Kasouma	sinip sampiy vampikasma
20	Touampe	Tuampe	tuwampe	How'at	ot
30	Reouampe	Revampe	rewampe	Wambe tot	vampiriot
40	Ineouampe	Inevaampe	inewampe	Towat	vampitoot
50	Asikneouampe	Asiknevampe	asiknewampe	Wambe ereot	
60	Ivanousampe	Ivanvampe	iwanwampe	Inat	
70	Araouanouampa	Arvanvampe	aru'anwampe	Wambe Ashkeneot	
80	Toubisanouampe	Tubisanvampe	tupisanwampe	Ashkineot	tupsen
90	Sinepisanouampe	Sinepisanvampe	sinepisanwampe	Wampe **ewanhot**	
100	Ouanouampe	Uanvampe	wanwampe	Arouwam howat	askinot
200	Tousnouampe	Tuanvampe	tuwanwampe		
1000	Ouanotneouampe	Uanotnevampe	**wan-otne-wampe**		ivanot
2000	Touanotneouampe	Tuanotnevampe	**tu-wan-otne-wampe**		
10000	**Teanonnouampe**	Tevanonnevampe	te-wan-onne-wampe(？)		
20000			言わない		
100000		(ignor.) [不知]			
1000000		(ignor.) [不知]			

「表2」

幕末和資料数詞（1）

意味	『蝦夷語集録』円吉1864（文久4） 原典	村崎転写	『番人円吉蝦夷記』1868(慶應4) 原典	村崎転写
1	シ子ッフ	sinep	シ子ッフ	sinep
2	トウフ	tup	トッフ	tup
3	レウフ	rep	レッフ	rep
4	イ子ッフ	inep	エ子ッフ	enep
5	アシキ子フ	askinep	アシキ子フ	askinep
6	イワンへ	iwanpe	イワンベ	iwanpe
7	アルワンへ	aruwanpe	アルワンベ	aruwanpe
8	トへサンへ	tupesanpe	トベサンベ	tupesanpe
9	シ子へサンへ	sinepesanpe	シ子ベサンベ	sinepesanpe
10	ワンへ	wanpe	ワンベ	wanpe
11			シ子フエガシマワンベ	sinepekasimawanpe
15				
20	ホツ	hot	ホツ	hot
21	シ子フイカシマホツ	sinepikasimahot	シ子フエガシマホツ	sinepekasimahot
25			アシキ子エカシマホツ	askineekasimahot
30	ワンへイトホツ	wanpeituhot	ワンベイトホツ	wanpeituhot
31	シ子フイカシマワンへイホツ	sinepikasimawanpeihot	シ子フエガシマワンベイトホツ	sinepekasimawanpeituhot
35			アシキ子エガシマワンベイトホツ	askineekasimawanpeituhot
40	トホツ	tuhot	トホツ	tuhot
41			シ子フエガシマトホツ	sinepekasimatuhot
50	ワンへイレホツ	wanpeirehot	ワンベエレホツ	
60				
70				
80				
90				
100	アシキ子ホツ	askinehot	アシキ子ホツ	askinehot
200				
500			アシキ子ホツエカシマトシ子ワノホツ	askinehotekasimatusinewanohot
1000	ワンアシキ子ホツ	wanasikinehot	アシキ子シネワノホツ	askinewanohot
3000			アシキ子シ子ワホツエカシマワンシ子ワノホツ	askinesinewahotekasmawansinewanohot
10000			アシキ子ワンシ子ワノホツ	askinesinewansinewanohot

[表3]

幕末和資料数詞（2）

『藻汐草』1793（寛政4）			『北海道土人語案内樺太土人語日用会話』1904（明治38）		
意味	原典	村崎転写	意味	原典	村崎転写
1	シ子ツプ	sinep	1銭	シ子カペーカ	sine kapeeka
2	ツ'ーツプ	tuup	2銭	トカペーカ	tu kapeeka
3	レツプ	rep	3銭	レカペーカ	re kapeeka
4	イ子ツプ	inep	4銭	エ子カペーカ	ene kapeeka
5	アシキ子ツプ、アシキ子	askinep, askine	5銭	アシ子カペーカ	asne kapeeka
6	イワンベ、イワン	iwanpe, iwan	6銭	ユワンカペーカ	yuwan kapeeka
7	アルワンベ、アルワン	aruwanpe, aruwan	7銭	アルワンカペーカ	aruwan kapeeka
8	ツ'ベシャンベ、ツベシ	tupeshanpe, tupesi	8銭	トペサンカペーカ	tupesan kapeeka
9	シ子ベシャンベ、シ子ベシ	sinepeshanpe, sinepesi	9銭	シ子プサンペカペーカ	sinepusan kapeeka
10	ワンベ、ワナキ	wanpe, wanaki	10銭	ワンベカペーカ	wanpe kapeeka
11	シ子ツフイカシマワンベ	sinep-ikasma-wanpe	20銭	ホン子カペカ	honne kapeeka
15	アシキ子イカシマワンベ	askine-ikasma-wanpe	50銭	エンゴゴマーシカ	enko komaasika
20	ホツ	hot	1円	シ子ゴマシカ	sine komaasika
21			2円	トゴマシカ	tu komaasika
25			3円	レゴマシカ	re komaasika
30	ワンベイツ'ホツ	wanpe-i-tuhot 4×20-10	4円	エ子ゴマシカ	ene komaasika
31			5円	アシ子ゴマシカ	asne komaasika
35			6円	ユワンゴマシカ	yuwan komaasika
40	ツ'ホツ	tuhot 2×20	7円	アルワンゴマシカ	aruwan komaasika
41			8円	トベサンゴマシカ	tupesan komaasika
50	ワンベイレホツ	wanpe-i-rehot 3×20-10	9円	シ子ペサンゴマシカ	sinepesan komaasika
60	レホツ	rehot 3×20			
70	ワンベイカシマレホツ	wanpe-ikasma-rehot 10+3×20			
80	イ子ホツ	inehot 4×20			
90	ワンベイカシマイ子ホツ	wanpe-ikasma-inehot 10+4×20			
100	アシキ子ホツ	askinehot 5×20	10円	ワンゴマシカ	wan komaasika
200	シ子ツ子ホツ	sinetunehot			
500			20円	ホン子ゴマシカ	honne komaasika
1000					
3000					
10000					

[表4]　方言別数詞比較表(1)

日本語	樺太ライチシカ方言 (服部 1964)	北海道沙流方言 (服部 1964)	北海道旭川方言 (服部 1964)
1	sineh	sinep	sinep
2	tuh	tup	tup
3	reh	rep	rep
4	iineh	inep	inep
5	asneh	asiknep	asiknep
6	iwanpe	iwanpe	iwanpe
7	arawanpe	arawanpe	arawanpe
8	tupesanpe	tupesanpe	tupesanpe
9	sinepisanpe	sinepisanpe	sinepisanpe
10	wanpe	wanpe	wanpe, sine hot
11	sineh 'ikasma wanpe	sinep 'ikasma wanpe	sinepikasma (wanpe)
12	tuh 'ikasma wanpe	tup 'ikasma wanpe	tupikasma wanpe
13	reh 'ikasma wanpe	rep 'ikasma wanpe	repikasma wanpe
14			
15			
16			
17			
18			
19			
20	tukunkutu, hohne(老)	hot, hotnep	tuhot
21	tukunkutu sineh	sinep 'ikasma hot	sinepikasma tuhot
22	tukunkutu tuh	tup 'ikasma hot	tupikasma tuhot
30	rekunkutu	wanpe 'etuhot	rehot
40	iinekunkutu	tuhot	inehot
50	asnekunkutu	wanpe 'erehot	asknehot
60	iwankunkutu	rehot	iwanhot
70	arawankunkutu	wanpe 'e'inehot	arawanhot
80	tupesankunkutu	inehot	tupesanhot
90	sinepisankunkutu	wanpe 'e'asiknehot	sinepisanhot
100	sinetanku	asiknehot	atuyta
101	sinetanku sineh 'ikasma	sinep 'ikasma 'askunehot	?
110	sinetanku 'orowa wanpe	wanpe 'ikasma 'askunehot	?
111	sinetanku 'orowa sineh 'ikasma wanpe		?
200	tutanku	wanhot	?
300	retanku	?	?
1000	sinewantanku	?	?
2000	tuwantanku	?	?
3000	rewantanku	?	?
1人	sine'aynu	sinen	sinen
2人	tu'aynu	tun	tun
3人	re'aynu	ren	ren
4人	iine'aynu	inen	inen
5人	asne'aynu	asiknen	asiknen
6人	iwan'aynu	iwaniw	iwaniw
9人	sinepisan'aynu	sinepisaniw	sinepisaniw
10人	wan'aynu	waniw	waniw

[表5]　方言別数詞比較表(2)

日本語	Sakhalin (La Perouse 1787) (Refsing 1996)	藻汐草 (1792) (成田 1972)	Sakhalin (Laufer 1899) (Laufer 1917)
1	cine (Tchine)	シネツプ	si-ne
2	tu (Tou)	ツーツプ	tu
3	te (Tche)	レツプ	te
4	ine (Yne)	イネツプ	ii-ne
5	asne (Aschne)	アシキネツプ、アシキネ	asik', asis-ne
6	iampe (Yhampe)	イワンペ、イワン	i-wan, i-wam-pe
7	arawampe (Araouampe)	アルワンベ、アルワン	a-ru-wampe
8	tubi sampe(Toubi schampe)	ツベシャンベ、ツベシ	tu-pe-sampe
9	cinebi sampe(Tchinebi sampe)	シネベシャンベ、シネベシ	si-ne-pe-sampe
10	wampe (Houampe)	ワンベ、ワナキ	wam-pe
11	sinebi kasma (Pchinebi kassma)	シネツフイカシマワンベ	
12	tubi kasma (Toubi kassma)	ツツプイカシマワンベ	
13	tebi kasma(Tchebi kassma)	レツプイカシマワンベ	
14	inebi kasma(Ynebi kassma)	イネツフイカシマワンベ	
15	asnebi kasma(Aschnebi kassma)	アシキネイカシマワンベ	
16	iambi kasma(Yhambi kassma)	イワンイカシマワンベ	
17	arawambi kasma(Araouambi —)	アルワンイカシマワンベ	
18	tubi sambi kasma(Toubi schampi —)	ツベシャンイカシマワンベ	
19	cinebi sambi kasma(Tchinebi schambi—)	シネベシイカシマワンベ	
20	wampebi kasma(Houampebi kassma)	ホツ	tu-kunkutu
21			
22			
30	wampebi kasma cine-ho	ワンベイツホツ	re-kunkutu
	(Houampebi kassma tchine-ho)		
40	ine wampe, tu-ho	ツポツ	iine-kunkutu
	(Yne houampe touhch-ho)		
50	asne wampe, te-ho	ワンベイレホツ	asis-ne-kunkutu
	(Aschne houampe taich-ho)		
60		レホツ	i-wan-kunkutu
70		ワンベイカシマレホツ	a-ru-wan-kunkutu
80		イネホツ	tu-pe-san-kunkutu
90		ワンベイカシマユーホツ	si-ne-pe-san-kunkutu
100	tu asne wampe te-ho	アシキネホツ	si-ne-tanku
	(Tou aschne houampe taich-ho)		
101			
110			
111			
200		シネワネホツ	tu-tanku
300			re-tanku
1000			wan-tanku
2000			
3000			
1人		シネニ	
2人		ツーニ	
3人		レーニ	
4人			
5人			
6人			
9人		シネニハイタワンニ	
10人			

[表6]　方言別数詞比較表(3)

日本語	樺太東南方言　(金田一　1913)	Kuril (Kracheninnikow 1738) (Torii　1919)　?は村崎記入	Kuril (Torii　1899) (服部　1964)　?は村崎記入
1	shineh	Sipnep	shine; shinep
2	tuh	Tououp	doobechi; tubichi
3	reh ineh	Rep	reebichi, rebichi
4	ashishineh	Inep	inep
5	ineh	Asik	ash'kimep, ash'kinep
6	iwampe	Ivan	iwampe
7	arawampe	Arouan	aruwampe
8	tupesampe	Toubis	dobisampe
9	shnipisambe	Sinepis	shinibesampe
10	wampe	Ououpis	wambe
11		Sinep-ikasmoua	shine wambe kasuma
12		Tououpitcha ikasmoua	doobechi wambe kasuma
13		Reepitch ikasmoua	reebichi wambe kasuma
14			
15			
16			
17			
18			
19		Sinepisan	
20	hoh,　tukunkutu	Tou-(ou)ampe	howat
21			shine howat kasma
22			dobechi howat kasma
30	wan e tuhoh, rekunkutu	Re-ouampe	wambe tot
40	tu hoh,　inekunkutu	Ine-ouampe	to wat
50	wan e rehoh, ashishnekunkutu	Asikne-ouampe	wambe ereot
60	re hoh, iwankunkutu	Iwan-ouampe	inat ?
70	wan e inehoh, arawankunkutu	Arouan-ouampe	wampe a'shkenot ?
80	ine hoh, tupesankunkutu	Toubisan-ouampe	ashkine'at ?
90	wan e ashishnehoh, shinepesankunkutu	Sinepisan-ouampe	wanbe ewanhot ?
100	ashishne hoh,　shinetanku	Ouan-ouampe	aruwan howat ?
101	shineh ikashma shinetanku		
110	wampe ikashma shinetanku		
111			
200	tutanku	Tou-(ou)an-ouampe	
300	retanku		
1000	wantanku	Ouan-otne-ouampe	
2000	hohtanku	Tou-an-otne-ouampe	
3000	rewantanku		
10000		Teanonnouampe ?	
1人	shine ainu		
2人	tu ainu		
3人	re ainu		
4人	ine ainu		
5人	ashishne ainu		
6人	iwan ainu		
9人	shinepesan ainu		
10人	wan ainu		